

# 人口減少社会における伝統芸能継承の新たな担い手

## —大学生による地域と連携した継承事例—

一般社団法人 College Impact Japan 代表理事

常葉大学 非常勤講師

田島 喜代美

### はじめに

日本では人口減少と高齢化が進行しており、2070年には総人口が9,000万人を下回り、高齢化率は約39%に達すると推計されている（厚生労働省 2026）。地方都市では若年層の都市部への流出が重なり、地域社会の維持のみならず地域文化の継承にも影響が及んでいる。なかでも中山間地域における祭礼や伝統芸能などの民俗文化は、地域住民が世代を超えて参加することによって維持・継承されてきたが、近年では地域内部のみで担い手を確保することが困難となる事例が増えている。

こうした社会変化のなかで、伝統芸能の継承は地域住民のみで担われるものから、地域外の人材を含む多様な主体が関与する形への変化もみられ、人口減少社会における地域文化継承の新たな担い手の可能性を示すものとして注目される。

本稿では、静岡県浜松市で設立された大学生 NPO 法人による伝統芸能継承の活動を事例として、地域外の若者が伝統芸能の継承に関わる取り組みについて検証する。さらに、活動に参加した大学生や若者への意識調査を通して、彼らが果たす役割と直面する課題を明らかにし、人口減少社会における伝統芸能の継承の新たなあり方について考察することを目的とする。

### 研究の背景

静岡県浜松市は、北に赤石山系、東に天竜川、南に遠州灘、西に浜名湖を擁する多様な自然環境に囲まれ、豊かな自然景観と広い地理的広がりを持つ。市域面積は 1,558.11 平方キロメートルに及び、岐阜県高山市に次いで全国第 2 位の広さを持つ。また、2005 年の広域合併により、旧 12 市町村の指定文化財を引き継いだことで、浜松市はその件数・総点数ともに全国でも有数の規模を有する都市となった。さらに、市内の文化財の分布を見ると、北区および天竜区など市北部の中山間地域を含む地域に全体の約 3 分の 2 が集中しており、これらの地域には祭礼や伝統芸能をはじめとする多様な地域文化が現在も受け継がれている。<sup>1</sup>

浜松市の中山間地域は、市域面積の約 65.65%（1,022.81 平方キロメートル）を占めており、その多くが森林であるため可住地が限られている地域である。これらの地域では 1960 年以降人口減少が続いており、2010 年までの人口増減率は、中山間地域全体で約 50%以上の減少が確認されている。さらに少子高齢化も深刻であり、2014 年の状況では、中山間地域の 14 歳以下の人口比率は 8.10%となり、高齢化率は 39.15%と市平均を大きく上回り、地域によっては 50%を超える状況となっている。中山間地域には約 330 程の集落が存在するが、世帯数の減少が進み、10 世帯以下の小規模集落が全体の 3 分の 1

を占めるなど、地域社会の維持が大きな課題となっている。<sup>2</sup>

こうした人口減少や高齢化の進行は、地域社会の維持のみならず、地域に伝承されてきた祭礼や伝統芸能の継承にも大きな影響を及ぼしている。従来、これらの伝統芸能は地域住民が世代を超えて参加することによって維持されてきたが、担い手の減少により地域内部のみで継承することが困難となる事例が増加している。このような課題を抱えるなか、2013年に19の保存会の参加で発足した浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会は、現在では22の保存会、関係団体2団体が参加して祭や芸能の保存と継承における課題を共有しながら後世に伝えていく取り組みを行っている。

本連絡会の初代会長の前嶋功氏によれば、「加入している多くの団体が存続の危機を感じている」とす一方で「門外不出、女人禁制の文化を頑なに守り抜いている保存会もある」と指摘しており、伝統芸能の継承をめぐる状況は一様ではない。近年は少子化や若年層の地域外流出の影響により、これらの伝統芸能を担う中心世代が60代以上の高齢者となっている地域も多くみられる。また、継承者や関係者の間では「次世代への継承」よりも「自身の世代で役割を果たすこと」を重視する意識がみられる場合もあり、継承に対する認識の変化が指摘されている。

表1は、2015年から10年間にわたる参与観察に基づき、伝統芸能の継承構造を世代別に整理したものである。伝統芸能の継承は単一の世代によって完結するものではなく、複数の世代がそれぞれ異なる役割を担いながら維持されている。本表では、継承に関わる主体を四つの層として捉え、その関係構造を示した。

表1 地域伝統芸能における継承主体の世代構造

層	年齢	役割
中核継承者層	65歳～	祭礼運営・技術継承の中心
次世代層	50～60代前半	中核継承者の後継
次々世代層	30～40代	予備的担い手
未来継承者層	学生・生徒・児童	将来の担い手

このような世代的連続性によって伝統芸能の継承は維持されてきたが、近年は若年層や働き盛り世代の地域外流出の影響により、とりわけ次世代層および次々世代層の参加が減少し、世代間の継承構造が弱まりつつあることが指摘される。

一方で「未来継承者層」に位置する大学生は、学修活動や地域連携活動を通じて地域社会と関わる機会を持つ存在であり、地域外から継承活動に関与する主体として注目される。とりわけ地方都市においては、地域の大学で学ぶ大学生が「地域人材」として期待される場面も多く、地域課題の解決や地域活動への参加が求められるている。大学生は地域の保存団体と協働することで、継承の担い手として期待されると同時に、地域内外の子ども世代との接点を形成する役割を担う可能性がある。

## 大学生 NPO 法人による伝統芸能継承活動

本稿では、静岡県浜松市の中山間地域を拠点に活動する大学生によって、2022年に設立された「NPO 法人わたぼうしグランドデザイン」<sup>3</sup>の伝統芸能の継承活動を中心とした地域づくりの取り組みを事例として取り上げる。同法人は、市民団体として活動していた2015年から天竜区春野町勝坂地区におよそ420年伝わる市指定無形民俗文化財「勝坂神楽」<sup>4</sup>の継承活動に参加し、翌年2016年から浜名区引佐町川名地区におよそ600年伝わる、国指定重要無形民俗文化財「川名ひよんどり」<sup>5</sup>の継承活動に10年近くにわたり参加している。(表2) 保存会と連携しながら、祭礼や行事などに参加することで伝統芸能の継承活動に継続的に取り組んでいる。また、大学生による継承活動として特徴的なものは、未来継承層となる児童・生徒と協働した継承活動や、ICTを活用した取り組みによる持続可能な継承への積極的な取組が特徴的である。現在は30名の会員で精力的に継承活動と継承を支える地域づくりに取り組んでいる。

表2 NPO 法人わたぼうしグランドデザインの継承活動状況 (2026年3月現在)

名称/指定区分	歴史	開催	保存団体	演目等	活動開始
市指定無形民俗文化財 勝坂神楽	424年	10月	勝坂神楽保存会	◎道中舞 ◎ほろ舞 ◎ぬさ舞 ◎笛 ◎太鼓	2015年
国指定重要無形民俗文化財 川名ひよんどり	600年	1月	川名ひよんどり保存会	◎若者練り ◎水垢離 ◎ヒドリ ◎ウタヨミ ◎舞 伽藍しずめ 田遊び オブッコサマ ◎笛 ◎太鼓 シシウチ行事等神事	2016年

◎継続的参加 ○条件的参加

聞き取り調査から筆者作成



▲ 川名ひよんどり「ヒドリ」(2026年1月撮影)

地域外の大学生が2つの伝統芸能の継承に関わることになったきっかけは、浜松市内の大学科目によるPBL型アクティブラーニング(Project/Problem-Based Learning: 課題解決型学習)のフィールドとして勝坂自治会と協定を締結したことから始まった。PBL型アクティブラーニングとは、学修者は実社会の課題に対して自ら問いを立て、調査や協働的な活動を通して解決策を導く学修手法である。知識の習得にとどまらず、問題解決の過程を通じて、思考力や主体性、協働性を育成する学修方法とされている。近年では、地域社会の課題解決と結びついた教育実践として、大学教育の中でも広く導入されている。

こうした大学生の学修の成果に期待した勝坂地域の支援のもと、初期4年間は8月1か月間、勝坂に山村留学をし、昼は耕作放棄地で農業を行い、夜は旧勝坂小学校で保存会から稽古を受け、地域のなかで継承に取り組むを行ってきた。同じく、この継承方法に関心を持った川名ひよんどり保存会から

も、若連（30歳定年）の急激な減少により、このままでは継承者が途絶えてしまうという危機感から、大学生への期待が寄せられた。これに賛同した大学生が、NPO法人の前身となる市民団体を設立し、2つの継承に取り組むこととなった。

「勝坂神楽」および「川名ひよんどり」の保存会に共通する特徴として、地域や世代を超えた継承活動に積極的である点が挙げられる。両保存会は、これまで「門外不出」とされてきた継承について、地域外の若者である大学生にも門戸を開き、舞やお囃子の演者として参加を受け入れてきた。

勝坂神楽の継承活動の変遷をまとめる（表3）。2015年以降の取り組みを通じて段階的に展開してきた。初期段階では、地域外の大学生による舞の継承が認められ、その後、お囃子（笛）や太鼓への女子学生の参加が可能となり、継承の担い手の拡大が進んだ。この時期の継承は保存会による対面指導を中心に行われ、山村留学や地域での定期的な稽古を通して、地域や保存会と近い関係の中で技能が伝えられた。また、これまで口伝で伝えられてきた舞の継承に加え、参加者自身が稽古の様子を映像として記録し、スマートフォンで確認するなど、大学生に身近なデジタル機器を活用した記録と共有が行われるようになった。

2020年以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により祭礼が中止され、継承活動は大きく制約を受けた。その一方で、この期間にオンラインを活用した取り組みが進められた。LMSを用いた継承システムや教材の整備が行われ、対面とオンラインを組み合わせたブレンディッド・ラーニング（Blended Learnig）型の継承方法が試みられた。

2023年以降は祭礼が再開され、継承活動は再び地域内での対面を基盤として行われるようになった

が、YouTube配信やデジタル教材の作成、映像記録などデジタル技術の活用は継続された。さらに動画制作やAIによる所作分析など新たな技術の導入も試みられている。このように、本事例では地域内での対面による伝承を基盤としながら、社会状況の変化に応じてオンラインやデジタル技術を補完的に取り入れる形で継承方法の多様化が進められてきた。



▲川名ひよんどり 「はらみの舞」  
(2026年1月撮影)



▲ 勝坂神楽

最終年の記念撮影－舞の師匠と大学生（2025年10月撮影）

表3 大学生 NPO 法人による伝統芸能継承活動の変遷と継承手法

活動時期		継承に係る出来事	継承手法		デジタル活用
			対面	デジタル	
初期	2015年～	地域外の大学生に舞の継承を解禁 8月1か月山村留学 週2回夜7時～	●		映像による所作の記録 動画で保存会の動きを各自撮影し、スマートフォンで確認
	2016年～	女人禁制を解く：お囃子（笛）に参加	●		
	2019年～	女人禁制を解く：お囃子（太鼓）に参加	●		
中期	2020年	コロナ禍中止		●	LMSシステムによる継承システム着手
	2021年	コロナ禍中止 神事のみ再開		●	勝坂オンライン（バーチャル）ツアー旅行商品の開発 LMSシステムおよび教材が完成
	2022年		●	●	集落に隣接する小学生との体験教室再開。 オンラインで勝坂保存会会場とつなぐ
後期	2023年～	4年ぶり再開 女人禁制を解く：舞に参加 保存会会長、保存会前会長逝去	●	●	YouTubeライブ配信 デジタル教科書の作成
	2024年	獅子頭をNPO法人が引き継ぐ 保存会会員逝去	●	●	映像による所作や祭礼記録 集落に隣接する小中学校の総合の時間で授業を行う
	2025年	勝坂神楽 最後の奉納 最後の獅子頭NPO法人大学生	●	●	YouTube配信、動画制作、AIによる所作の分析、映像記録

勝坂神楽の継承について聞き取り調査から筆者作成

また、未来継承者層における継承では、映像教材やオンラインを活用した学習などデジタル技術の導入が急速に進んだ。一方で、保存会による大学生への継承は現地での対面による稽古が継続して基盤となっている。とりわけ舞や太鼓は、単なる技術の習得にとどまらず、地域の生活や祭礼の進行、神への祈りや感謝といった文化的文脈と深く結びついている。これらの芸能は当該集落の中で人から人へ伝えられることに大きな意味を持ち、地域社会における継承の持続を支えてきた要因と考えられる。

以上のことから、伝統芸能の継承においては、舞やお囃子、祈りや地域の風俗儀礼といった本質的要素を地域の中で保持しつつ、教材の工夫や映像記録、配信、学習方法など伝承の方法については社会状況に応じて柔軟に変化させていくことが重要である。

本研究では、伝統芸能の継承活動に参加した大学生の経験や認識を把握するため、グループインタビューを実施した。対象はNPO法人わたぼうしランドデザインに所属する大学生講師3名（A、B、C）とし、2024年8月5日に同法人事務所において実施した。インタビューでは、①勝坂神楽を教える経験、②児童の授業に対する反応、③継承活動の意義、④今後の継承活動への意欲と展望の4点について聞き取りを行い、逐語記録を作成したうえで内容をテーマ別に整理・分析した。

その結果、大学生は子どもに神楽を教える立場になることで、神楽の動きや歴史、意味を改めて学び直す必要性を認識していた。また、児童の理解を深めるために物語性を取り入れ、ゲーム感覚の指導方法を工夫するなど、学習を促す試みが行われていた。授業を通して児童が神楽の動きに関心を持ち、地域文化として理解を深めていく様子も確認された。さらには、この活動が児童の地域文化への誇りや文化的アイデンティティの形成につながる可能性があるとの認識が示されるとともに、今後も継承活動に関わり神楽の魅力を広く伝えていきたいという意欲が語られた。これらの結果から、大学生が継承活動に関与することは、地域内部の担い手不足を補完するだけでなく、地域の伝統芸能を次世代へとつなぐ媒介的な役割を果たす可能性を有していることが示唆された。

表4 NPO法人わたぼうしグランドデザイングループインタビューまとめ

観点	内容（インタビューから整理）
指導の工夫	神楽の歴史や意味を学び直し、物語性やゲーム的要素を取り入れるなど、児童が楽しみながら学べる指導方法を工夫していた。
児童の反応	当初は戸惑いも見られたが、次第に神楽の動きに夢中になり、地域文化として理解を深めていく様子が確認された。
継承活動の意義	児童が地域文化への誇りや文化的アイデンティティを育む契機となり、地域のつながりやコミュニティ形成にも寄与する可能性が認識された。
今後の意欲	学生は今後も継承活動に関わり、神楽の魅力をより多くの人々に伝えていきたいという意欲を示した。

田島喜代美、『大学生による中山間地域の伝統芸能『勝坂神楽』の次世代継承』を元に作成

本稿で取り上げた勝坂神楽は、地域住民の努力や大学生による継承支援など様々な取り組みが行われてきたものの、2025年をもって424年の歴史に幕を下ろすこととなった。しかし、本研究で明らかとなったように、地域外の大学生や子どもたちが10年間にわたり継承活動に関わる過程において、伝統芸能継承の意味や地域文化への理解を深めていく様子が確認された。こうした経験は、地域文化の価値を次世代へ伝える契機となり、新たな形で継承へつながる可能性がある。

一方、川名ひよんどりが伝承される川名地域では、現在11名の児童が大学生とともに、継承活動に励んでいる。祭礼当日には共に舞を奉納し、互いの健闘をたたえ合う姿が近年見られるようになった。また、NPO法人わたぼうしグランドデザインが主催する地域体験教室「かわなホーミーズ」が毎月1回開催されており、レクリエーションやアート活動を通して地域の子どもたちと大学生が交流し、新たなコミュニティの形成が図られている。

このように、伝統芸能の継承活動は、単なる技芸の伝承にとどまらず、地域文化を次世代へとつなぐ営みとして理解される。たとえ継承が困難な状況にあっても、その過程で培われた学びは、地域文化を支える人材の形成に寄与し、新たな継承の可能性を開く契機となりうる。

### 参考・引用文献

1. 浜松市『浜松市文化財保存活用地域計画 計画書』.2021.<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/117049/dai-2sho.pdf> (参照日 2026.3.14)
2. 浜松市『浜松市中山間地域振興計画 (2.中山間地域の課題)』.2015.<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/51178/cyuusannkannchiikishinnkoukeikaku.pdf> (参照日 2026.3.14)
3. NPO.法人わたぼうしグランドデザイン. <https://www.mishawtb.org/> (参照日 2026.3.10)
4. 浜松市.『勝坂神楽』.民俗文化財.<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/bunkazai/shitei/haruno/katsusaka.html> (参照日 2026.3.10)
5. 浜松市『川名ひよんどり』.民俗文化財.<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/bunkazai/shitei/inasa/inasa/kawana.html> (参照日2026.3.10)
6. 石山,恒貴.(2026.3)地域活性化における実践共同体の役割: NPO 法人による地域の場づくりに向けた取り組み事例. 地域イノベーション, 6, 63-75. 法政大学地域研究センター
7. 田島喜代美.(2024.9)大学生による中山間地域の伝統芸能『勝坂神楽』の次世代継承 - 講師役に従事した大学生のグループインタビューから. 教育研究実践報告誌. 第 8 (1) pp.27-34.常葉大学
8. 田島喜代美(2023.9) 地域の伝統芸能伝承の DX 化 - 対面式とデジタルを組み合わせたブレンディッドラーニングの可能性 - 教育研究実践報告誌. 第 7 (1) pp.7-14.常葉大学
9. 浜松市. 浜松市役所企画調整部企画課「浜松市総合計画」(2021年10月20日) [<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/totalplan2015/index.html>] (参照日 2026.3.14)